

おまえは日本人じゃないんだから日本の学校に来るな。

そんな心ない言葉を投げつけられたと小学校に上がったばかりの君は泣いていた。わんわん泣いていた。悲しかったのだろう。悔しかったのだろう。

それでも、君はしゃくりあげながら訴えた。

おかあさんには絶対にこのことを言わないで。おかあさん、きっと悲しむから、と。

君のおかあさんはインドネシア人。おとうさんは日本人。それから君も君のお兄ちゃんも日本人だ。不思議だろうけれど、生まれた時にホーリツでそう決められた。

そう、家族の中で日本人でないのは、おかあさんだけ。

そのことを君は気遣ってくれたんだね。自分がいじめられていたというのに。まだ小さいのに、君はすばらしい日本人だ。いや、ごめん、すばらしい人間だ。おとうさんは君を誇りに思う。

君の名前には、おかあさんの名前も加えられている。だから、とても長い。ミドルネームまで入った名前が日本のお役所に許されるか心配だったけれど、拍子抜けするほどあっさりと受理された。

日本だって変わってきていると嬉しくなったね。異文化に理解を示そうとしている、と。

君に日本とインドネシアの懸け橋になってもらいたい。おとうさんはそう思ってインドネシア名まで入った名前をつけたんだ。

こころのやさしい君は、差別のない世界を築く力にきつとなれる。おとうさんとおかあさんはそう信じている。

